

浄土

monthly
JŌDO

February - March 2001

20



21世紀もしゃべったる。

OK!

市外も、国際も、
インターネットも、
携帯も、
日本テレコム。



●お問い合わせはお客センターへどうぞ ☎ **0088-82** (無料) (受付時間) 9:00~21:00 (年中無休)

●インターネットホームページ <http://www.japan-telecom.co.jp/>

浄土

2001/2・3月号 目次

特集 増上寺・光明寺両台下を偲んで

藤堂恭俊台下を偲んで	福原隆善	2
再録因果応報を解く	藤堂恭俊	5
戸松啓真台下の御遷化を悼む	阿川文正	14
再録往生抄	戸松啓真	17
芭蕉の涅槃句	勝崎裕彦	24
鼎談「情報化時代の寺院第2回」		26
響流十方	袖山榮輝	34
連載「くすり箱」	市川真人	38
表紙の言葉	宇高良哲	40
Jフォーラム		41
映画紹介		42
浄土誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガで楽しい仏教用語	藤井ひろし	47
編集後記		48

表紙題字＝浄土門主 中村康隆
下アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎



特集 増上寺・光明寺両台下を偲んで

平成十二年十二月十四日 御遷化

大本山増上寺 第八十六世

謙蓮社大僧正仁譽上人晃阿不染恭俊大和尚

藤堂恭俊台下 八十二歳

藤堂恭俊台下を
偲んで

佛敎大学教授

福原隆善

藤堂恭俊台下の悲報に接し、愕然としました。不治の病に倒れたことを伝聞し、残念でしかたがありません。入院された後に途中で一時退院され、増上寺においてご挨拶をされ、再びもどることのない覚悟で再入院されたことを後に知り、ただ頭の下がる思いでいっぱいでした。

藤堂台下（以下は勝手ながら先生と呼ばせていただく）の宗内外のご活躍、あるいは学問の世界におけるご業績については枚挙にいとまがなく、いちいちについてはご紹介することができません。筆者はとくに知恩院浄土宗学研究所の主任として赴任された時、日中友好浄土宗協会の理事長としておられた時、そして佛教大学の付属幼稚園の園長としておられた時、のそれぞれに先生との強い接点がありますから、これらを通じて感じた先生のお人柄の一端について触れたいと思います。知恩院浄土宗学研究所には、鎌倉光明寺のご法主となられた藤吉慧海台下の後任として

おこしになりました。先生はたびたび研究会を開かれるなど私たち若い研究員にきめの細かいご指導をいただきました。原典を中心に地道な努力を必要とする学問の方法を示され、スタンダードなありかたを諫められました。しかも高度な教えの世界をいかに解り易く表現するかということも一方でご教示いただきました。晩年の松尾芭蕉が「高く悟りて俗に帰るべし」とした立場と同じものを感じます。

一方、佛教大学においては中国浄土教の祖跡を訪ねる研修団を何度も計画されました。大学の講義や重要業務のご多忙の中で率先して出かけられました。インド仏教や日本仏教の研究は盛んに行われていましたが、研究の少ない中国仏教の底上げをしていただくためにも、佛教大学や大正大学の学生教職員を引率され、十回を越える訪中団を派遣されました。祖師のまことに直接触れることにより、書物だけでは得られない貴重な体験をさせて

いただきました。訪中までに何回も研修会を開かれ、みずから訪問地の寺院や祖跡のことについての詳しい説明をされ、また現地においても日中友好を深められるかたわら、先頭に立って祖跡の歴史的・学術的な意義をお話いただきました。

幼稚園長の時代は大学の文学部長と兼任され、大学では教学の中核としての任務に当たられ、幼稚園においては仏教保育の原点をお示しいただきました。幼稚園時代の感激を「白道四季」「桜はなびら」などの自作の詩文に示しておられます。大学の難しい話は幼稚園で話あえばスムーズに進んだという逸話があったと聞いています。私は昨年四月より幼稚園に配属されましたが、藤堂先生の定められた日々のお参り、年間の仏教行事、教職員への法然上人御法語の拝読と講話、あるいは勤行等をそのまま継続させていただいています。

昨年十一月先生が入院されて相当悪い状態

でおられることを聞き、十二月四日に幼稚園の先生がたと東京の病院へ出かけました。先生はたいへん喜ばれました。しばらくお話をしておりましたところ、突然「一人も導くことのできないデクノボウ」と何回も自分を責められ、手ぬぐいで顔をおおわれ慟哭されました。一同啞然としてことばもありませんでした。先生の感化を受けて育っていった後輩は数えることができません。多くの人がびとを導いてこられたのに、ご自身を厳しく責められるのでした。不治の病を自覚しておられる中で、ご自身の病気の愚痴めいたことは何も言われず、また氣をとりなおして私たちを労われました。まさに菩薩のはたらきをしてこられたにもかかわらず、ご自身には厳しく処せられ、とても常人にはできないこととただ頭を垂れるよりありませんでした。

先生、どうかお浄土でいつまでも私たちを見まもっていただきますように。

合掌

再録 本誌平成8年2・3月号より

因果応報を解く

大本山増上寺法主

藤堂恭俊台下

わが増上寺では毎朝の勤行のあと、導師を勤めた私が法話をする事になっている。私は去年の十月から、法然上人のご自作の和歌を、三ヶ月にわたって連続的にお話をした。

法然上人（一一三三―一二二二）はんにんと言えば『選択本願念仏集』や『一枚起請文』の選者であることを、誰しも周知している。年代的に上人のあとに続く親鸞聖人（一一七三―一一六二）や日蓮聖人（一二二二―一二八二）は著述を多く遺されているが、それに比して上人は大変少ない。上人は訪ねきたる人たちと膝をまじえながら法門を語り、問いに答える対話の達人であり、決して著作の人ではない。その数少ない著述のすべては要請に應えて綴られたものばかり

で、上人が自発的に綴られたのは和歌だけである。

上人ご自詠の和歌は、上人諸伝中の圧巻、四十八巻からなる絵詞形式からなる『法然上人行状絵図』巻第三十の第六段に

上人やまとうたを事とし給はざりけれども 我國の風俗にしたかひて 法門によせては とき／＼おもひをのべられるにや。あるひは門弟のなかにしるしをけるを申つたへ あるひはてづからかきつけ給へるを没後に披露しける。

と前置きして、十七首を連載している。

また『黒谷上人語燈録』巻第十四の巻末に一首、巻第十五に九首を連載している。この両者を比較すると重複する和歌があるから、正味上人のご自詠は十九首となる。そのなか

「冬」を題する一首

ゆきのうちにほとけのみなをとなふれば

つもれるつみぞやかてきえぬる

という御詠をとりあげたい。

無始よりこのかた現在にいたるまで、私が身と口と意をとおして行つた行いは、すべて罪であると甘受するならば、積もりにつもつた罪の質量に啞然とせざるを得ない。積雪にたとえられるみずからの罪に気づかせて下さるのも、その罪を消滅して下さるのも、共に南無阿弥陀仏となえる一声一声をとおして触れる阿弥陀仏の光明によってである。

人は今、過去を背負い、未来を孕みながら現在を生きているという。今現に生きている私は、今までに私が身と口と意をとおして行つた行いの総決算として在り、また、今私が行っている行いの一つ一つが、未来の私を決定づけているのである。まさに自業自縛である。この因果律によつて私がこれからさき毎日の日送りをとおして、罪は雪だるまをころがすと次第次第に大きくふくらむように、積みかさねられるばかりで、罪の解消は望めない。

仏教は、世人が因果律にもとづいて物事を判断するのに対して、因をして果にいたらしめる縁を重視して因縁を説く。だからこそ積もつた罪は、阿弥陀仏の光明という縁に触れることによつて消滅するわけである。私たち浄土教徒は、阿弥陀仏の大願業力を増上縁とし、称名念仏を因と受けとめ、この因と縁とが和合することによつて往生できるのである。したがって、みずからがとなえた称名の数量の多少、つまり自分の力によつて自分の罪を消滅させる、というのでは毛頭ない。

雪は太陽の日ざしを受ければ、おのずから解けてゆく。しかし再び雪降れば、雪はまた積もる。そうだとすれば、阿弥陀仏の光明によつて、積もりにつもつた私の罪が文字どおり消滅したとしても、また新たに罪をつくるようでは、何にも芽出たくも、有難くもないと私は思う。

浄土三部経という浄土宗がよりどころとする經典のなか、とくに『観無量寿経』故には、「仏名を称するが故に五十億の生死の罪を除く。(中略)汝、仏名

を称するが故に諸罪消滅せり」(下品上生説)と説き、また「仏名を称するが故に念念の中に八十億劫の生死の罪を除く」(下品下生説)と説いている。この「除く」と、「消滅」という表現をいかに理解すべきであろうか。過去に完了した既成の罪をすべて「除き」「消滅」させるのか、今よりさきに犯しつくさるであろう罪をつくれなくするのかにについて、考えてみたい。

宗祖上人のご指南を『正如房へつかはす御文』の上に求めると

観無量寿經にとかれて候は 生まれてよりこのかた念仏一遍も申さず。それならぬ善根もつや／＼なくて あさゆうものころし ぬすみし。かくのごときのもろ／＼のつみをのみつくりて、とし目をゆけども 一念の懺悔の心もなく あかしくらしたるもの、をはりの時に善知識のすゝむるにあひて たゞ一声南無阿弥陀仏と申したるによりて 五十億劫があひだ生死にめぐるべき罪を滅して 化仏菩薩三尊の来迎にあづかりて仏の名となふるがゆへに罪滅せり。(『黒谷上人語燈録』卷第十四所収)

と、宗祖上人は述べられている。

この書状は、正如房すなわち後白河法皇の第三皇女式子内親王(一一五三?—一二〇一)が臨終を迎えて、法然上人に善知識を勤めて欲しいと願った書状に対する本目こまやかな長文の返書の一節である。

この上人のご文は『観無量寿經』下品上生の經説をふまえて綴られている。上人は罪の消滅を前向きに捉えて、これからさき「五十億劫があひだ」という長いながい年月にわたって、「生死にめぐるべき罪を滅す」というのであるか

ら、既成の罪はその人の未来を決定づけることができなくなるわけである。つまり念仏の一声ごとに称名する人が、罪をつくれなくするのが念仏である。まさに因果応報・輪廻から解放・解脱は、南無阿弥陀仏とみ名を呼び、おとなえする一声一声の上に加わる阿弥陀仏の大願業力によってこそ実現するのである。

* * *

中学生のころ、水は「H₂O」であると教えられた。汗を滝のように流し、カラカラに乾ききった喉を癒すために飲む水は、あまい冷たい水であって、決して「H₂O」の水ではない。その水も近ごろは煮沸して飲んだ方が安全である。といわれるようになりつつある。まことに淋しくも面倒なことである。日本の誇りであった山紫水明も、自然界に対する人為的な破壊や、いろいろ汚染物質によって汚されたりして、いわゆる複合汚染の結果、店舗にならべられた「○○名水」と銘の打たれた瓶やパック入りの自然水を、選び買い求めざるを得なくなってきた。

水と言えば空気であるが、その空気も水と同じように、私たちが生きるために与えられている。その空気も水に劣らず汚染を進めている。名水のようなパック入りの空気が市販されている、と聞いたことがないだけに、水よりも対処しにくいであろう。ともかく生活が便利になり、快適で速度化が進むのに比例して自然界は荒される。人と自然界とが調和をたもった営みが失われてゆく

ことに、一抹の不安を募らせる昨今である。私のような老人は先が短いから我慢できても、これから生まれてくる孫や曾孫たちが、さらに濃度をたかめた汚染社会に生きてゆかねばならないと思うと、可哀想な気がしてならない。

去年の晩秋のころ、手にした夕刊紙をひろげると、「木炭が変える畑の水と土」(朝日新聞)というタイトルが目になかに入ってきたので、心ひかれるままに読み始めた。すると「木炭は水質を浄化するはたらきがある」こと、「木炭を畑に入れると成長の速度、収穫時期の延長」などが指摘されてあった。水質の浄化については、生活排水による汚染が農業用水を茶色に濁したので、河川に木炭を沈めることによって水は澄み、悪臭は消え、水質の浄化に役立ったというのである。現今、千曲川の支流が流れる長野県戸倉町や、東京都日野市などの二十ヶ所で、木炭による水質浄化を実施しているという。また「ホウレンソウ」の成長速度が三週間で約一・五倍の差ができた、「キュウリ」の収穫期間が一月延びた、「メロン」の一茎に二個の実がつき、糖度も二〜三度上がった、という成果のあることを伝えていた。一読してただものの識りになっただけでなく、いろいろ考えさせられることが多かった。

人間の心は、汚染された濁り水にたとえられるほど、人間の性(結使・煩惱)によって汚染されている。この心の汚染は南無阿弥陀仏と阿弥陀仏のみ名を呼び、となえる称名念仏によって浄化される。このように阿弥陀仏の名号には、

あたかも浄化のはたらきを持つ木炭に匹敵する働きがある。法然上人は名号を木炭ではなく、浄摩尼珠という珠にたとえて、浄化のはたらきのあることを示されている。かの『十二箇条の問答』のなかに

浄摩尼珠という珠を にごれる水に投ぐれば 珠の用力にて その水きよくなるがごとし。衆生の心はつねに名利にそみて にごれる事かの水のごとくなれども 念仏の摩尼珠を投ぐれば 心のみづをのづからきよくなりて 往生をうる事は念仏のちから也。

と、記されているのがそれである。中国の農家では池の溜り水を担桶に入れ、担つて家の中に常置されている明礬の入った大甕に入れておく習慣がある。ここでは明礬が水質浄化の役を果たしている。

心のにごりとは、人間の性のはたらきを指し、それが汚染の根源となつていく。一概に人間の性といつても、具体的には数えきれないほど多いから、無数といわれる。しかしその代表をむさぼるといふ貪欲、怒り腹だちといふ瞋恚、ものの道理を本当にわきまえてないといふ愚癡の三つにしばることができ。しからば人が生まれながら具えているこの三つの汚染の根源は、称名念仏のはたらきによつて、どのように浄化され、人格の形成に役立つであらうか。

この貪欲、瞋恚、愚癡という三つに代表される人間の性を激しくはたらかせた人であっても、阿弥陀仏の名を呼び・となえるならば、阿弥陀仏の光明、とくに清浄、歡喜、智慧という三とおりの光明のはたらきを受けて、貪欲の人は「無貪清浄の身となり、持戒清浄の人と等しい」人となり、また瞋恚の人は

「忍辱の人と同じ」人となり、愚癡の人は「智愚の勝劣あることのない」人になるとは、『逆修説法』（三七日の条）に示された法然上人の言葉であり、上人が『選択集』のなかに「よく瓦礫を變じて金となさしむ」（第三章私釈股）と指摘された言葉を想起せしめられる。このように手の平をかえすように、今までとは異なった人になれるのは、貪欲などの人間の性を断じたり、持戒、忍辱、智慧の行を実践した結果ではない。人間の性のはたらきがでなくなつたことを意味する。かくして称名念仏には人格の形成に大きなはたらきを持つことを認めざるを得ないのである。空気や水に負けず劣らず、人の心も汚染を進めている。そのような実社会のただ中であつて、称名念仏の果す役割もまた甚大といふべきである。



撮影／小堀祐二
協力／浄土宗出版室

大僧正藤堂恭俊台下略歴

大正七年十一月十九日和歌山県生まれ。
佛教専門学校（現佛教大学）、大正大学
仏教学科を卒業され、昭和二十年京都教
区信重院住職に就任、平成五年に大本山
増上寺八十六世法主に推戴された。

宗内外では、浄土宗教学院理事、日中
友好浄土宗協合理事長、宗宝・宗史跡保
存会委員、教学審議会委員、浄土宗総合
研究所所長を歴任。昭和五十四年には文
学博士、平成四年には勲三等瑞宝章を受
章された。

また、佛教大学での長年の履歴として、
同大学教授（昭和三十七年）・文学部仏
教学科主任（昭和五十二年）・文学部長
（昭和五十七年）・文学研修科浄土学主
任（昭和六十年）・名誉教授（平成四年）
などの要職を歴任された。

台下は、宗門の興隆と宗学研究に尽力
され、数多くの著書を残されている。

〈主な著書〉

『無量寿経論註の研究』、『善導大師の研
究』、『法然上人研究第一卷、第二卷』、

『一枚起請文のこころ』

その他、論文、解題、随筆等多数

特集増上寺・光明寺兩台下を偲んで

平成十二年十二月二十八日 御遷化

大本山光明寺 第百拾壹世

光蓮社大僧正善譽上人正阿法順啓真大和尚

戸松啓真台下 八十四歳

戸松啓真台下の
御遷化を悼む

大正大学名誉教授

阿川文正

平成十二年十二月十四日、大本山増上寺ご

法主藤堂恭俊台下ご遷化のあと、同月二十八日大本山光明寺ご法主戸松啓真台下のご遷化の悲報に接し、浄土宗学の両巨頭相次ぐ宗門の不幸は、私共後学の者にとつて誠に悲しい世紀末であり、全身の力が抜けてゆく思いでただお念仏を称えるのみであつた。

戸松台下は、服部英淳勸学のあとを受けて大正大学浄土学主任教授を勤められ、私は台下が定年退職されるまで副主任をしてお仕えし、共に宗学の研鑽と学生指導に当たってきた。殆んど毎日のようにお目にかかり、或は電話でお話するなど親密な交流をもたせていただき、多くの学恩にあずかることができた。ご存命中、麻布のご自坊にご帰宅の時、奥様と共々お食事をと申しながら、また幾度か鎌倉で家内共々の食事とお誘いをうけながら、雑務繁多の私の身で仲々実行に移されなかった

ことが悔まれてならない。

台下は戦時中、中国中部に派遣され、戦後シベリヤに抑留、言葉には表現できない程のご苦勞をされて復員、復員後は小石川淑徳学園に奉職、そして昭和三十三年大正大学に奉職され、四十二歳で浄土宗学を講義されることとなった。戦後の十数年の空白は正に戦争の大きな犠牲であつた。しかし誰もが経験することができない体験と犠牲とが研究の意欲を引き立たせ、台下をして真の宗学者ならしめ、一宗を代表する器の大きい偉大な台下となられたのである。

四十五年の長きに亘つてご道交を戴いた台下との間には、数々の懐かしい思い出がある。とても総べてを記すことはできないが、昭和四十八年、台下を中心に大谷旭雄氏、田中祥雄氏の四人で徳本行者研究を始め、基礎資料の調査蒐集を積み重ねたが、昭和四十八年文

部省科学研究助成を受け、昭和五十年より毎年一卷づつ全六巻を完成させた事が大きな思い出である。岡崎・紀州の調査では、朝から夕方遅くまで大谷教授の車で各地を駆け廻り、私共は一日の仕事をこの辺りで終わろうとすると、台下は一人ででも伝承される遺跡や名号石があれば見に行き、一つも見落さないという研究の態度と意欲を持たれていた。また或る時、研究室の先生方と研修を兼ねた一泊旅行をした時、真剣な討論の最中に長時間目を閉じていられるので寝ていられるのかなと思うと、ふと目を開けられて正論を述べられる、という大器の人格を示されていた事も

懐かしい思い出である。

大本山にご晋董されてからの台下は、鎌倉の風物を愛され、本山・教区の公務を意欲的にこなされ、訪ねる人には温和なお顔で接しられ、鎌倉の御前様として親しまれた。また大学の教え子も全国に多く、台下を敬慕して鎌倉に詣でる道俗は毎日途切れることが無かったと聞いている。

ご遷化の後、神奈川教区各組と本山関係者で、七日毎にご供養の奉仕をされていると聞くが、台下が如何に本山を中心に地元で敬慕されていたかを物語る証ではなからうか。

合 掌

往生抄

大本山光明寺法主

戸松啓真台下

人は信仰がなくても生きることができる。また死ぬこともできる。しかし時には、人は信ずることによって生きる上に或る不思議な力や、信念をあたえられる。またそれは何びともさけることのできない死滅の恐怖を和らげることがある。往生という語は、古くは中国において梵語經典から漢訳された無量寿經や阿彌陀經に見ることができ、それによると極樂淨土へ「往きて生れる」とである。それはこの世の穢土を去って、あの世の淨土に生れることである。従って必ず死を媒介とする。それゆえ後に、日本の通俗語では死と同じ意味につかわれた。その人の往生は立派であつたというがごときである。このように往生という語は、一般にはたいした矛盾もなく生と死との相反する二つの意味

をもつ言葉として用いられてきた。

仏教ではこの世で人間が迷い苦しむのは、人間に煩惱があるからとする。そしてその煩惱は、人間の生死そのものから起りきたるものとみる。むさぼり(貪)といかり(瞋)とおろかさ(痴)は、いろいろな煩惱の根本となるものである。釈尊はそれゆえ、生と死を四苦の中に入れて老病と共に、いかにしてその苦から脱すべきかを求道の出発点とされたのである。このように煩惱は、人間の生死そのものに深く潜在しているものであるが、多くの人はそれを自覚しない。ちょうど本当のことは何も知らないのに、知っていると思っている人が多いように。そして煩惱は時には人間を破滅におとし入れる。そればかりでなく、ひとりの人間の煩惱は多くの人を集団を国家を破滅にいたらしめることさえある。しかしながら仏教は人間の本質を、このような灰色の面だけとみるのであろうかというところではない。一方では煩惱をみとめながら、他方では「一切衆生悉有仏性」というように、どんな人間でもみな仏となるべき本性があるとみるのである。そこに明るさがある。正しい仏法によるならば、悪人も仏になれるのである。人間が仏法を見捨てても、仏法は人間を見捨てることはないのである。大乘の仏教では、人間の生死そのものに根ざす煩惱を消滅させるのに二つの法があるとする。一つはこの世において自分の力で煩惱を消滅させて、四乗の果を得ようとする「聖道門」である。いわばこの世で悟って仏になることである。これは非常に困難な道で、すでに大乘月藏經というお経に、これまで一人も成就した者がいないと述べている程である。聖道門とは日本の宗

でいえば、真言、天台、禪などである。さてもう一つは「浄土門」である。これは浄土に往生して、煩惱を滅して仏になる道である。浄土に往生してということは、この世の生の彼方に死して生れることである。そのためにわれわれは生きている限り念仏を申すのである。なぜなればわれわれの申す念仏とは、往生のために仏と釈尊がえらばれて付与されたものであるからである。それが他力の念仏である。念仏はどこまでも、われわれがと能える念仏であるが、一声一声の念仏で往生がきまるのは、仏がおきめになったものだからである。「阿彌陀仏は一念に一度の往生をあておき給える願なれば、念ごとに往生の業となるなり」とは法然上人のお言葉である。そして法然上人が念仏は一念でも多念でも同じく往生するといわれたが、しかも生きている限り相続せよというのは、いかなる意味であろうか。一念で往生できるなら、多念相続の必要はないのではないかという思いがする。ここで法然上人が「十二箇条問答」でのべられた次のお言葉を思いおこすのである。即ち「つねに臨終の思いをなしてとなうべし」と。そして平生の念仏と臨終の念仏とは何の変りもないのであり、「平生の念仏も死ぬれば臨終の念仏となり、臨終の念仏ものぶれば平生の念仏となるなり」（『念仏往生要義抄』）といわれている。このことは平生の念仏というけれども、よくよく考えをいたせば、臨終の念仏と何ら変りはないのではないだろうか。今日一日生きたということは、今日一日死んだことである。五十年をよくも生きてきたということは、実は五十年死んだことである。あと二十年の生しか残されていないということであろう。そのことは、生と生きていること

は死でもある。即ち生の中に死が入りこんでいることである。念々生死である。念々生死であるから、往生のためには念々相続が大事でなければならない。法然上人が一遍の念仏であとはいらないというような一念往生義でもなく、信の一念以後の平生の念仏は報恩の念仏であるというようなものでもなく、死ぬまで念仏を申せと説かれたことは、煩惱具足のわれわれに深い意味があるのではないかと思う。それを自力的などというのはあたらないのである。

過日、ある真宗寺院の仏教文化講座で「法然上人の念仏」という話をした時、一つの質問を受けた。その聴衆はあらかじめ聞くところによると、五十人位が常連で真宗の教えには相当知識のある者、あとの五十人位はその都度の聴衆とのことであつた。質問というのは、親鸞聖人が宝治二年（一二四八）に書かれた『高僧和讃』によると、法然上人がなくなられた時に奇瑞があつたというが、それは本当であるかというのである。それに対して、私は次のように答えた。法然上人の伝記によると、臨終の幾日か前にお弟子が病床の枕元の弥陀像の御手から、臨終の行儀に従つて五色の糸をおとりになるようすすめられた時、上人はそのようなことは必要ないとこれをしりぞけられたのである。また法然上人と同時代の天台の慈円僧正の『愚管抄』という歴史書には、法然上人の御往生であるから何か特別なことがあるかも知れぬと人々が集つたが、さしたることもなかったと記していると答えた。すると再び質問者は立つた。そして親鸞聖人がそのように書いたのであるから、それは事実ではないかと繰返した。ねた。私もまた同じ答えを繰返した。ただこのように言葉を加えた。即ち宗教

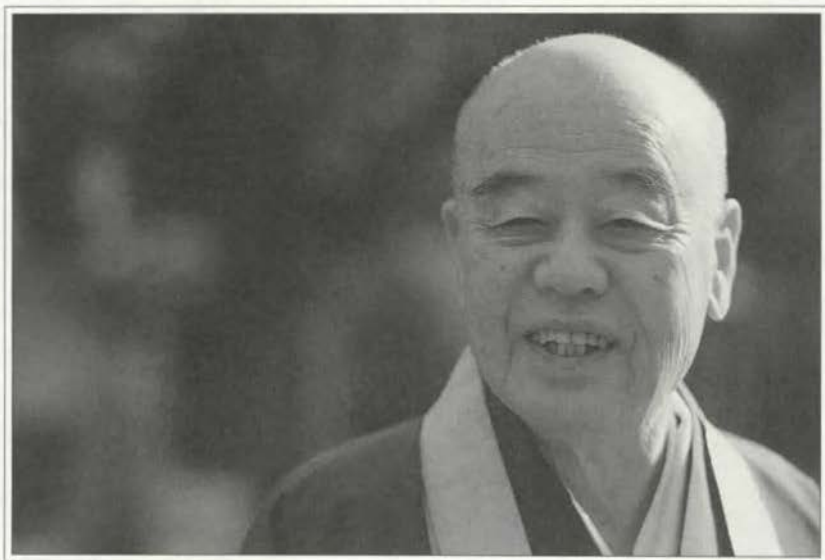
的眞実というものは、或る者には事實であるが、他の者にはそれが事實でないということもある。親鸞聖人はそのような師の奇瑞をかく信じていたのであるうと。こんどは質問者は、笑いながら引き下ってくれた。あとで控室で係の方から、あの質問者はなかなか執拗で、一回や二回では引き下らないのに、今日は珍しく笑顔をみせたということを知った。私はその質問者がどうしてあのような質問をしたのかはかりかねたが、恐らく私のお話した「法然上人の念仏」の一部に、上人の念仏は平生即臨終の念仏であって煩惱具足の人間なるが故に平生の相續を重んじるのであるということを知られて、法然上人の臨終の奇瑞を認めさせることによって、親鸞聖人の現世主義的な念仏に対して、法然上人の念仏は来世主義的ではなからうかという公式論を引き出させるためではないかとも思ったのである。

後日、法然上人の最期場面をしらべてみるため七つの伝記をみた。そのうちの一、二のものには、臨終にあたって弥陀三尊の来現を見たという弟子について述べられているが、多少の潤色はあっても、特に奇瑞を強調しているものはないのである。このことと臨終の行儀をしりぞけられたということから、私は法然上人の念仏が臨終よりも平生に重きをおかれたものと思うのである。（ただどの伝記も御臨終の幾日か前に紫雲がたなびいたということとは共通して記していることである。が紫雲については別の機会にゆずる）

さらに法然上人の弟子であった親鸞聖人も、平素の言葉として「某閉眼せば、加茂川にいれて魚にあたうべし」とのべられたというが、その最後は『伝絵』

によると、口に世事をまじえず、ただ仏恩の深きことをのべ、声に余言をあらわさず、専ら称名たえることがなかったのである。また同じく法然上人の念仏の流れをくむ法孫一遍上人も、かねてお弟子が上人の臨終についてたずねられた時、よき武士と道者は、死することをあたりに知らせぬことぞといわれた。そして自分が死んだ後には「野に捨て獸にほどこすべし」といわれている。また往生の前に、弟子が紫雲のたなびいたことを申し上げると「さては今明は臨終の期にあらざるべし。終焉の時はかような事はいささかもあるまじき事なり」とのべられた。正応二年（一二八九）八月二十三日の朝早く阿弥陀經の誦誦の終るとともに息たえられたが、諸人さらにこれを知らずという。それが一遍上人の最期であった。

三人のよき念仏者は、ひたすら往生のために念仏を申された。念仏のたえた時がいのちのたえた時であった。そしてその念仏は、現世においては自らの生の支えとなつて、たくましい生命力を発揮された。



撮影／小堀祐二
協力／浄土宗出版室

大僧正戸松啓真台下略歴

大正五年九月十四日東京都生まれ。昭和十六年三月大正大学仏教学部を卒業され、同五十年四月に東京教区心光院住職に就任され、平成五年に大本山光明寺第百十一世法主に推戴された。

宗内外では、浄土宗教学院理事、(助)浄土宗奨学会理事、教学審議会委員長、教学院研究所主任、日中友好浄土宗教会理事を歴任。平成元年には勲四等瑞宝章を受賞された。

また、大正大学での長年の履歴として、同大学教授(昭和四十五年)・同大学埼玉校舎学監兼教養部長(同五十三年)・同大学浄土宗学監(同五十九年)・同大学学総合仏教研究所(同六十一年)・同大学名誉教授(同六十二年)などの要職を歴任された。

〈主な著書〉

『徳本行書全集(全十六巻)』、『善導教学の成立と展開』、『浄土教論集』その他多数。

芭蕉の涅槃句

大正大学助教授
勝崎裕彦

二月十五日は仏陀釈尊入滅涅槃の日であり、全国の諸寺院では涅槃会を営む。私は今、大聖釈尊の「一化八十年のご生涯に、ひたすら心をいたす。はるかに敬慕し、尊崇し、讃仰する。その思いのたけ、想いのほどは、大乘菩薩のひたむきな求法・求道の菩薩精神といてよい。遠く二千五百年昔の中インド・クシナガラの村里から、悠久の時空を越えて、大いなる智慧は光り輝き、慈悲のいつくしみはあまねくあふれる。

涅槃・涅槃会は、俳諧では春の季語の重要な一項を担っているが、類語の多いことでも知られる季題である。涅槃会にまつわる季語を列記すると、お涅槃・涅槃像・涅槃図・涅槃絵・寝釈迦・仏忌・涅槃忌・涅槃寺・涅槃

涅槃圖(芝・天光院蔵)



堂・涅槃雪・仏の別れ・二月の別れ・去りし
仏・梅檀の煙・鶴の林・鶴林の夜半・餅花
煎・団子撒き・瘠せ馬・常楽会・遺教経会・
遺教会・千本念仏など、まことに多い。

ここでは松尾芭蕉の元禄七年（一六九四）
の一句を紹介する。芭蕉五十一歳、この年の
十月十二日に逝去している。

ねはん会や皺手合る数珠の音

『続猿蓑』に収められた佳句であり、涅槃
会に集う老翁老婆のありようを巧みに写し取
っている。ところが『三冊子』には、

灌仏や皺手合る数珠の音

とあり、一転して、四月八日の釈尊降誕の灌
仏会を季語としている。「初八ねはん会や、
と聞べし、後なしかへられ侍るか」と付記が
伝えられているが、仏生会と涅槃会の対比・
対照もよろしく、皺手に爪ぐり合わされる数
珠の音に見事に収束した芭蕉である。

新春鼎談

情報化時代の 寺院

第2回

今岡達雄

青木照憲

真野龍海

司会 本誌編集チーフ

長谷川 岱潤



前回は主にインターネットなどの魅力、すばらしいことについてのお話であった。今回は、むしろその問題点などから、そうした社会にあってこれからの寺院は何を求められ、どのようにあるべきかなどを話し合って頂いた。

インターネットの現状

司会 物質文明が謳歌した二十世紀に対して、二十一世紀の主役が物から情報に変わったなどということが言われています。総理も国会でIT革命などという言葉を説明もなく使っています。今、何が問題なんでしょうか。青木 今、情報革命などと言われていますが、これって実は人間が言葉を持った時点からすでに始まっているのではないのでしょうか。昔は言葉の伝達はこのように向き合って声が届く範囲で行うものがすべてだったわけでは

が、やがて、のろしを上げて敵が責めてきたことを伝えたり、鏡を使って光で合図を送ったりと、伝わるその距離をだんだん「遠く」してきました。これが今でいうIT革命だと思っ

うんですよ、そして今は、コンピュータの前に座って文字を打ち込むことによって、電話線を通じて地球の裏側のコンピュータにその文字が瞬時に届く。物理的にはすごい距離の伝達が可能になった訳です。ですがその距離を感じさせないというだけで、行っていることは人間どうしの会話であることに変わりはないのです。


 浄土宗 善照寺
 



The First Virtual Temple in Japan Since 1995.12
 あなたは当寺院への21853番目の訪問者です。
 1997.10.16更新



今岡達雄氏 <http://www.bekkoame.ne.jp/imaoka/right.html>

昨年、総理が言い出したIT革命という言葉ですが、残念ながら運用技術のことばかりおっしゃっているように感じられます。本当に問題なのは、そこから出てきた情報を、どのように自分が受け取って判断して、それを使ってゆくかということだと思います。

今岡 私どもが本を読むというのは、数日で一冊読めるかどうかなのですが、インターネットで検索するというのは、それこそ瞬間にして何千、何万の項目と出会えるわけです。しかも関連性の高い言葉から先に出てきますから、それを最初の10項目、20項目の中で、どれが本物らしいかということを経時に見分けられないといけないですね。これはやはり特殊な能力だと思うのです。情報の世界の中にいて、これは本物、これはうそだということをかき分けるには、何か新しい能力を人間に要求されているような気さえますね。

青木 確かに全部を読んで判断するのではなく、その一部分を読んだだけで本物かどうか

判断するんですから、特殊な能力といえますね。検索を間違えると項目数ばかり多くなつてしまう。そこから選ぶのは特殊な触角がないとダメかもしれませんね。

ただ、私は本物かどうかの見極めは最終的には人間の智慧、人間性そのものだと思います。たとえば最初に法然上人『選択本願念仏集』というものが世に出て来たとき、それを読んだ人がこれが真実だと判断する能力と、ある意味同じではないでしょうか。

真野 当然情報を読み取る人間に知識がなければ、どんな情報だつて「ごみ」と一緒ですよ。やはり肝心なのは、使い手である我々が何を求め、何をしたいかを明確にしなければだめだということでしょうね。

司会 インターネットで一番の問題は、パソコンを使えるかどうかだと思うのですが、真野先生はいつごろからパソコンをお始めになったのですか。

真野 十五年くらい前からです。私は専門が

サンスクリット語ですから、翻訳をやることが多いのですが、そうするとパソコンはとても便利なのです。鉛筆と消しゴムではもうとてもできませんね。パソコンだと眠くならないでできるんですよ。(笑)

ホームページを通じて 若い檀家さんと交流

司会 ホームページを開設されたのは一昨年とのことですが、お檀家からの反応はありますか。

真野 ホームページを開いたといっても、壮大な考えはまったくありませんでした。ただ、普段あまりお寺にお参りに来ない若い人と交渉がもてたらいいなという思いだけでした。お寺に来ない人でも、住職として話ができればかなと。

ですから、私の寺の檀家は二百軒くらいなのですが、Eメールのある人はどのくらいいるか調査してみたのです。それでお持ちのと

00000000 0000 10000/2/25



The TWO Of The WORLD



諸行無常 一切皆苦 涅槃寂靜

この世はなんとつまらぬところだと思ひのきた

●ついでにまた

●ついでにまた

●さあ旅にでよう

Internet update 1999/2/25 (Last Update made mail/Internet update) No. 10
was designed by yoda



青木照憲氏 <http://www.ne.jp/asahi/u-rnk/common/2world/index.html>

ころにホームページを連絡したわけです。今はまだ十軒くらいですが、いろんな情報のやり取りもできて、話したこともなかった若い人と話すようになりましたね。

今岡 今、真野先生がおっしゃったのはクロードのホームページですね。これは企業の中の業務用システムに近くて、お寺を中心に各檀家さんと情報のネットワークを組んでいて、法事の予約から、お寺で行う行事の案内とその出欠を取ったり、浄土宗の教えなどが書き込め、ネットで結ばれます。

またもうひとつネットでは、非檀信徒向けももちろん可能です。これはまったく相手が不特定多数ですから、仏教やお寺に関する質問を受けたり、自分の寺の宣伝広報ができます。以前のネットというのはこの不特定多数向けだけの利用法だけだったのです。

真野先生のお話を伺って気づきましたが、寺院のIT革命というのは結局、寺院というのは何のためにあって、僧侶は檀家さんど

ういうふうにおつき合いをして、関係を持ってゆくか、これにどう利用できるかがポイントのようですね。

青木 確かにそうですね。ホームページを作るということは、自分のお寺で何をやるか、誰でも参加できる行事はあるか、僧侶としてのアンデンティティはしっかりしているか、などが確立されていないと難しいと思うのです。

真野先生がおっしゃられたように、今までお寺に來なかつた人にも興味関心を寄せることとしてとても大事なことですよね。寺檀関係がだんだん崩れている中で、家単位ではなく個人重視の姿勢でこちらが考えることとしててもすばらしいと思います。

真野 従来の手紙ですと、あて先がすべて戸主になりますからね。若い夫婦には伝わらないこともあるんですよ。

司会 インターネットの特徴でしょうが、多数の人相手に発信している情報が、受け手が

反応するとその時点で一対一の関係で話が始まるということですよ。つまり、たえず自分の言葉で発信しないと、何も答えられなくなってしまうということでありませんか。

青木 そうですね。結局は住職個人のパーソナリティの問題、資質の問題なんですね。文字だけで勝負するわけですから、威厳や年齢は関係なくなります。格好つけてもすぐに見抜かれてしまいますからね。

今岡 それに今までお寺と檀家さんはある意味で閉鎖した関係にあったと思うんですが、これからはこうしたネットが盛んになることによって、逆に情報が縦横無尽にどんどん広がってきますから隣近所との比較ではなく、北海道や九州の和尚さんとも比較される時代になってくるということなんです。

司会 まだまだご住職の大多数は、メールアドレスも持っていない方が多いと思いますが、この現状をどう思われますか。

天光院



ご意見・ご感想はこちらへ



真野龍海氏 <http://www.evam.ne.jp/tenkoin/top.html>

今岡 確かに現代は情報化の時代、とにかく興味をもってお寺の中に取り入れてゆく姿勢が必要だと思います。しかしそれには努力が必要です。だけでもまだその努力はすぐに報われるものではありません。しかし始めなければどんどん遅れてしまうことも事実なんですね。

とにかく若い人、30代までですかね。この人たちには絶対やらなくてはならないことです。40代、50代の人はやらないとちょっと遅れちゃうぞって感じですかね。65歳以上の人はまあできたらいんじゃないですか。でも若い人は絶対です。

司会 なるほどよくわかりました。実は私も法然上人鑽仰会にもホームページがありますので、大変参考になりました。本日は有り難うございました。

(一)

〈対談者紹介〉

今岡達雄

(千葉・善照寺住職・五十二歳)

三菱総合研究所の研究員として、長年インターネット関連の調査、インターネットが今後どのように普及してゆくかということの研究していたとのこと。一九九五年住職専業となるために退社し現在に至る。

ホームページ開設は一九九五年十二月。

ホームページの主な内容は、仏教や浄土宗、寺に関するあらゆる質問に答えることから、懺悔室、相談室という二つの部屋を作り、人生相談をしている。

顔がまったく見えない対話だけに、相談内容と答えを提示し、こういう答えをする者だとわかるようにしていることが、信頼感を得ているのでは、と語る。

青木照憲

(東京・西蓮社住職・五十二歳)

建築会社を経営していたこともあり、若い人達と交わることが多かったこと、また機械いじりが大変好きで、機械に対する興味がとても強く、また時代に乗り遅れないようにしたいという思いからコンピュータに興味を持った。

ホームページ開設は一九九七年十二月。

インターネットに興味を持ったのは、たまたま衝動買いをした機種にモデムがついていて、電話線につないだときネットサーフィンの「掲示板」で、すぐに仲間ができたことから、夢中になったとのこと。

ホームページの中は、寺の由緒、つまり西誉上人のことなどを書き込んでいる。

真野龍海

(東京・天光院住職・七十八歳)

梵文学の研究という仕事以外に、俳句やコラズ、油絵と大変多趣味であり、そんなお仲間とのやり取りもあって、ホームページを一九九九年七月に開設した。

ホームページは、お寺のニュースや歴史から、参考になるような氏自身の論文、そして俳句教室、文化教室、コラズやギャラリートと多種多様とのこと。

実はホームページ維持運営に関しては、サポーターとして若い人に時々来てもらい、助けてもらっているとのこと。

愚かさを推し量る愚者は、それ故にまた、賢者である。
賢者であると慢心を抱く愚者は、それこそ愚者と言われる。

〔ダンマパダ〕第六三偈

お金の雨によっても、欲望が満足されることはない。

賢者は「欲望とは心が晴れることのないもの、苦しみである」と、わきまえている。

〔ダンマパダ〕第一八六偈

*『ダンマパダ』……パーリ語の詩文で綴られた仏典。漢訳『法句經』に相当する。『スッタニパータ』とともに初期の仏教教団の教えを伝え、多くの仏教徒が釈尊の言葉として親しんできた。

賢者への道―欲深き愚者の覚悟を―

たしか『イソップ物語』だったと思う。「カエルのおなか」という話があった。ある日、子ガエルが生まれて初めて牛を見た。今まで見たこともない大きさに驚き、その姿を親ガエル（あるいは王様ガエルだったか）に伝えた。すると親ガエルは「この私より大きな生き物などいるはずがない。このくらいのが大きだったかい」と言いながら、プーッとお腹をふくらませてみせた。「ううん、もっと大きかったよ」「もっとだよ、もっと」と言う子ガエルの声に、親ガエルはお腹をふくらませ過ぎて、とうとうパンクしてしまった。見識のないまま物事をわきまえず、自惚れた振る舞いをしていては、やがて身を滅ぼしますよ、という教訓話である。

気象庁によれば、二十世紀の百年で地球全体の平均気温は約〇・六度上昇した。なかでも東京は二・九度上昇し、「冬日」が六十一日から三日に激減、熱帯夜は〇・七日から二十九日と激増した。二酸化炭素など温室効果ガスの影響が大きいとされているが、科学文明の恩恵に浴した私たちは、自然界のバランスを崩すほどにエネルギー

ギー燃料を消費してしまったのだろう。いかなる影響があるかは知らないが、近年、局地的な集中豪雨などが頻発し、都市部でのヒートアイランド現象が指摘されるようになった。私たちの生命を育むこの地球、我がもののように扱ってはい、いつかきつとパンクしてしまうのではないだろうか。

心配事ならまだまだある。このほど、信州大学の研究者によって、ポリ塩化ビニール（塩ビ）製品に多く含まれる環境ホルモン（フタル酸ジエチルヘキル、DEHP）の及ぼす影響が確認された。塩ビは特に食品などの包装を中心に、私たちの生活を便利にしてきた身近な素材である。ところが、DEHPを少量でも摂取したネズミのグループは、孫の第三世代になると出生率が約七割に、生存率が約五割に低下したのである。マウス実験の段階とはいえ、ショッキングな結果だ。科学文明の発達は私たちの死角を突き、いつの間にか生物の存亡に関わる危険な物質を招き寄せていたのだ。

二十世紀、快適さ、便利さが豊かさの指標であったかも知れない。

しかし、その快適さは私たちの欲望を満たすだけではないのか。その便利さはほんの僅かな時間と手間を惜しむためのものではないのか。もしもそのために、この地球や子々孫々の「いのち」に犠牲を強いていたならば、いったい何のための科学文明なのだろう。

釈尊は、たとえお金の雨が降っても、ヒマラヤ山に匹敵する黄金を手に入れても、人間の欲望は満たされないと喝破した。欲望を満たしたところで心は晴れず、結局は苦しみが残ると言った。しかし、それを繰り返してしまう愚かしさが、偽らざる人間の姿であり、私たちの本性である。釈尊は「愚者が愚かさについて考えれば、それは賢者である」と教えて下さった。人として豊かな生活を望むのは当然のことだが、人間の欲望は限りなく深く満たされることはない。二十一世紀、私たちはお腹をパンクさせたカエルになっていいのだろうか。自らを欲深い愚か者と覚悟する、そういう勇氣をおこそうではないか。科学文明の発達を求めつつ、本当の賢さを考える世紀が来たのである。

(浄土宗総合研究所 袖山榮輝)

連載

『くすり箱』②

カゼをひかないために

薬剤師

市川真人

今は一年の内では一番寒い時期です。「かぜ」をひいている人も沢山いるのではないでしょうが。

「かぜ」の症状は、寒気、くしゃみ、鼻みず、鼻づまり、せき、たん、頭痛、又、全身の節々が痛い、高熱が出る、人によってはお腹が痛くなり、吐きつぽかったり、下痢をしたりといろいろです。

「かぜは万病の元」とも言われていて、「かぜ」を治す特效薬を発見すればノーベル賞まちがいなしとまでいわれるほど、「かぜ」の根本的治療法・薬はありません。働きざかり

のサラリーマンなどは、熱を押して「かぜぐらいで休めるか」と気の強いところをみせれば格好はいいかもしれませんが、この「かぜ」がもとで、気管支炎、肺炎等を起こしてしまつては元も子ありません。

「かぜ」は、どうしてひくのでしょうか。英語では cold、かぜをひいている I have a cold といいます。漢方でも三千年以上も前に書かれ、漢方の原典といわれている『傷寒論』（しやかんろん）という本も、字のごとく、寒（さむさ）に傷（きず）つけられた病気の治し方が、ひき初めから順をおって書かれています。洋

の東西を問わず、冬の「かぜ」は寒さが引き金ということです。

では、「かぜ」をひかないようにするには、寒い所へ行かなければいいかといえば、そうはいきません。又、「かぜ」を一〇〇%予防してしまうワクチンもまだ見つかつてはいません。これは日常の生活のなかで気を付けていく以外にはないでしょう。バランスのとれた食事、規則正しい生活、適度の運動で常に体力を養っておく。できるだけ無理をしないようにし、外（特に人混み、病院等へ行った時等）から帰ったら、うがいと手洗いを励行をして下さい。しかし、ちょっとおかしいなア、と思ったら、できるだけ早く次のどれかを試してみして下さい。（私達が初期と考えるのは、いつもとちよつと違うな、かぜかなと思つてから30分以内位です）

★『葛根湯』（かっこんとう） Ⅱ首筋・手の平が乾いていて、頭痛、首筋・肩のこり、鼻づまり、寒気等★『桂枝湯』（けいしとう） Ⅱ首筋・手の平が湿っていて、頭

痛、鼻づまり、寒気等★『小青龍湯』（せうせいりゅうとう） Ⅱ透き微った鼻水、白い水っぽい痰、咳、発熱等★『天津感冒片』（てんしんかんぼうぺん） Ⅱのどが痛く、口（のど）の渴き、咳、頭痛等★『勝湿顆粒』（しょうしつかりゅう）（冬にもあるが、夏の方が多し）Ⅱムカムカ、食欲不振、下痢、全身倦怠等★『道三湯』（どうさんとう）（お碗に刻み長ネギをお碗1/3、削り鰹節3〜4g、みそ適量を入れ、熱湯を注ぎ混ぜ、フウフウしながら飲む）Ⅱ頭痛、発熱、鼻水、鼻づまり、寒気等★『卵酒』（たまござけ）（卵1個を割りほぐし、蜂蜜又は砂糖小さじ1〜2杯を入れ、酒又は赤ワインを混ぜ、弱火にかけてかき混ぜて「アルコールをとばす」泡が消えたらでき上り。熱いところをグツと飲む）Ⅱ頭痛、発熱、鼻水、鼻づまり、寒気等

一〜二回飲んで治らなければ薬局・医療機関へ行き、次の時期、又は、今の貴方に合った薬を選んでもらつて下さい。何れも飲んでみる価値はあります。



法然上人 絵伝

(大本山増上寺蔵)

母子の別れと旅立ち

前号に増上寺本法然上人絵伝の解説がありましたが、この絵伝が増上寺に伝わるのは、増上寺十二世の親智国師源誉存庵上人が、前將軍徳川家康の推挙により、慶長十五年（一六一〇）後陽成天皇から特別に国師号を勅許され、御礼のため宮中に参内した時に、天皇からいただいた拝領物であるからである。通称「残欠二巻本」といわれ、法然上人の前半生の伝記である。後二条天皇の書出しとされているので、千三百年頃浄書されたものであろう。詞書、絵ともに優れており、国の重要文化財に指定されている。

今回はこの絵伝から法然上人の母子の別れと旅立ちの場面を紹介したい。馬に乗って後をふりかえっておられるのが法然上人である。法然上人の出家の原因について最近種々議論されているが、この絵伝では法然上人は父の中陰供養をすました後に、父の遺言にしたがって近く菩提寺観覚得業のもとへ旅立ったと記されている。いわゆる浄土宗の伝統的な立場をとっている。

この絵は、わずかなお供を連れて旅立たれる幼少の法然上人が母との別れを悲しみ、後をふりかえっている様子が情緒的に描かれている。

（宇高良哲・大正大学教授）



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

映画
紹介

宮寄善文

みやざき・ぜんぶん
現長野教区浄土宗青年会会長
松本組 見性寺副住職
松本で映画の自主上映会を長
年主宰している。



ブータン映画 『ザ・カップ 夢のアンテナ』 を観る

★ブータンで初めて製作された映画

昨年、映画会社の方から「宮寄さん、来年チベット仏教の少年僧達が主人公のブータンの映画を公開するんだけど、観ていただけませんか」と連絡がありました。まだ、その時は日本での題名も決まっていなかったのですが、その映画が「ザ・カップ 夢のアンテナ」です。映画は北インドのチベット仏教僧院で厳しい戒律を守り修行している少年僧達の物語。修行僧とはいえ、時には勤行中に居眠りや悪戯をしてしまう小坊主たち。そして、主人公のウゲン達小坊主は、サッカーのワールドカップが気になり、気持ちもそぞろで修行にも身が入らなくなりました。ワールドカップをどうやったら見ることが出来るか。

この悪戦奮闘を中心に、僧院にチベット自治区から新しく亡命してきた少年、そしていつでも故郷のチベットに帰れるように毎日荷造りを確認する僧院長のエピソードなどとともに、僧院での毎日が生き生きと描かれた映画です。

★映画の中のサッカー

映画を見続けていると、サッカーは本当にワールドスポーツであり、生活に密着しているスポーツであることが、かいま見られます。ヨーロッパや南米の国の映画は勿論、アジアの国の映画でも同じです。「サッカー」は時には主人公が観に行くスポーツだったり、路地裏でやるスポーツだったり、試合の放送がテレビやラジオから流れてくる生活の中の音であつたりします。

一九九〇年に起こったイラン大地震を舞台に、ある監督が以前自分の作品の主人公を演じた少年の安否を確かめる為、被災地を探し続けるというイラン映画があります。主人公が倒壊した村を通りかかった時、丘の上でアンテナを立てている人に出会い「家も壊れてしまっているのに、何を見るのか」と尋ねると、「今回、ワールド・カップを見逃すと、次は四年待たなくてはいけない」と答えます。生きていく逞しさサッカーに対する情熱が同時に描かれています。



★上映予定
1月27日より
Bunkamura 6F ル・シネマにて
東京都渋谷区道玄坂2-24-1
Tel:03-3477-9264
★2月11日第1回(11:00)上映前
ケンシエ・ノルブ監督舞台挨拶
ル・シネマにて
★2月9日
ケンシエ・ノルブ監督講演会
詳細未定
問い合わせ先
㈱パンドラ Tel:03-3555-3987

★監督はブータンの高僧

さて、チベット仏教の僧院を舞台にサッカ
ー映画?を監督したのはブータンの一九世紀
の聖人ジャムヤン・ケンシエ・ワンポの生まれ
変わりとなされ、僧侶名ゾンサル・ジャムヤ
ン・ケンシエ・リンポチェとしてブータンで
は広く尊敬されている高僧です。そして撮影
は北インドにあるチョッキリ寺院で行われ、
先生を始め修行僧たちも実際チョッキリ寺院
で生活をしている人達で演じられました。

衛星放送が始まったことにより、アンテナ
とテレビがあればどんな所でも「情報」が空
から降つてき、インターネットで世界中と繋
がる時代。

長い伝統と歴史と共に、尊い教えを守るチ
ベット仏教。映画の中で描かれた寛容さ、そ
してチベット自治区、チベット仏教の現実の
厳しさも読み取っていただきたく思います。

この作品は、世界の映画祭に出品され、好
評を得ると共に、ブータンの映画館でも長蛇
の列で迎えられました。

浄土誌上句会

●春氷

〔特選〕

御手洗に絹光るごと春氷

細田 初枝

鳥居をくぐって手を淨め、口をすすぐとい
うのが参詣の手順なのだが、御手洗は薄氷に
覆われていた。その氷を絹の光のようだと思
えた目は確かである。凍て返る空気の張りが、
身の引き締まる思いに重なる。

〔佳作〕

春氷ホースの首の桶に垂れ

片桐てい女

春氷薄く紅き旅の空

池田佳代子

春氷光りあつめて溶け始む

石原 新

●芥菜

〔特選〕

痛める身の目に芥菜の美しき

堀 管子

病に臥して自然に触れる機会がない。
これは取れたてのものというより、ひたしに
でもしたものだらう。新鮮な緑が目にしみ

選者=増田河郎子

る。多少省略できそうなところはあろうが、
厳しく言うほどでもなからう。

〈佳作〉ざっくりと切って芥菜匂い立つ

結城 由利

芥子菜の畑に沿いたる一軒家

浜口 佳春

芥子菜の漬物添えて島の宿

井村 善也

●自由題

〈特選〉

しぼり出す絵具ときめく夜長の灯

野村多加子

秋の夜、画布を前に絵の具をしぼり出す。
パレットの上で絵の具がときめく。ときめい
ているのは描き手のほうだが、感情移入によ
って、作者の気持ちをうまく引き出してい
る。夜は長い。

〈佳作〉街路樹に電飾の帯まといけり

金谷 友江

切り千しの加減見にゆく杖ついて

小久保すゑな

足浴の母に浮かべる柚子四五個

北川 弘子

風水自由題

②季語ではありません

浄土誌上句会のお知らせ

参加作品

編集部選

春水

春水桶に月光止まりけり
うす笑いして少女去る春水
風の中かき菜にうすく春水
芹萌える小溝に薄き春水
うす水影あわくして鯉の群れ
花びらのごとく吹かるる薄水
春水熱湯かけて献花せり
登校の子等ふみくだく春水
春水淡き陽を承く嬉しきよ
春水踏んで食しき街抜ける
誇らしげみちかき春のうす水
鏡の如く澄みてきらりと春水
春水少年ボール遊び馳けり

井村善也
増田信子
金谷友江
中島一子
嶋田喜代子
中島富士子
上野明達
山本教子
長尾子浪
河合富美枝
堀 菅子
山本美代子
佐藤雅子

締切・三月二十日
発表・『浄土』五月号
選者・増田河郎子（『南風』主宰）
応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。
●特選各1名・佳作各3名
葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

芥菜

芥菜をもむ指先の深みどり
芥菜や一人住いの家増えて
芥菜や亡き母慕きびしかり
豊かに漬け込む芥菜は手先をあくに染め
硝子器に漬けて芥菜実験めく
浅春や芥菜を漬け重し水
芥菜の程よき辛き朝の膳
芥子菜のちよつとからきに酒量ほど
芥菜やめはり寿司にて腹くくる
にぎり飯芥菜添えて炊き出しぬ
緑増す芥子菜洗う里の水
芥子菜の浸しに胡麻ふる夕餉かな
自由題

河合富美枝
佐藤雅子
細田初枝
山本美代子
片桐てい女
金谷友江
中島一子
嶋田美代子
山本教子
長尾子浪
谷しげ子
大村和代

千大根やせて夕日の落ちにけり
枯木立白き浅間を背なにして
のどけしや松籟幽かお茶の席
惜春や年月夫と領らつ
こてふ蘭溢れる遺影焼香す
雪明かり蕪村の襖絵浮かびおり
寒餅を切る包丁に力あり
冬鳥や山また山の日溜まりに
連磨の忌口重き夫傍らに
三輪車畳に置かれ春を待つ
萌黄色のひつじ田つづく車窓かな
涅槃西風植物ゲノム解かれけり

坂倉左武朗
金谷友江
嶋田喜代子
中島富士子
山田玲子
山本教子
長尾子浪
河合富美枝
佐藤雅子
細田初枝
山本美代子
片桐てい女

マンガで楽しい仏教用語

漫画・藤井ひろし

億劫

「おっくう」と読み、面倒くさいとか、気がすすまない、という意味に使われますが、仏教用語では、おっくう、おっくうと読み、時間の単位をいいます。

百千万億劫の略で、劫はインドの時間の単位で最も長く、四十里の大地に芥子を満たし、それを百年に一度一粒取り去り、無くなるまでとか、一キロ四方の大岩を三年に一度天女の羽衣で撫で、その岩が無くなるまでという時間を言います。

想像を超えた長さで、考えることもできないことから、こうした意味になったようです。



編集後記

ほればれと掃除せぬ間の雪景色 岱潤

二十世紀の日本は、一家四人殺害というニュースで終わり、二十一世紀は仙台のクリニックでおきた准看護士が容疑者の、点滴に筋弛緩剤混入による少女の殺人未遂事件というニュースで始まった。この事件はその後の調査で十人以上にのぼる被害者が数えられ、前代未聞の医療従事者による犯罪となりそうだ。

海外でもこうした事件が報告され、英国では医者が患者にヘロインを注射して十五人を殺害した事件や、米国でも六人を故意に殺害したとして、元看護士が逮捕された事件等が新聞に報じ

られた。英国の開業医団体は「医師として屈辱感はあるが、公共機関による監視を受け入れる」という発表をした。

政治家、医療従事者、そして宗教家、こうした存在が、監視を受けなければならぬ存在となつてゆくのが二十一世紀なのであろうか。こうした事件を「他山の石」として、我々僧侶の社会も自浄努力が必要な時期に來ているように思えてならない。

今号は、急ぎよ両法主台下の追悼号としましたので、梅原猛氏の『法然の哀しみ』への感想文は四月号からの掲載とします。

(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
村田洋一
佐山哲郎
間川彰道

編集顧問

大室了皓

浄土 六十七巻 二三月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十二年一月二十日
発行 平成十二年二月一日

発行人 真野龍海

編集人 宮林昭彦

印刷所 株式会社 シーディーイー

〒一〇五〇〇一一

東京都港区芝公園四・七・四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三)五七八 六九四七

FAX 〇三(三)五七八 七〇三六

振替 〇〇一八〇八・八二八七

ホームページ <http://www.jodo.ne.jp>



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



電圧高



民衆近し、静かに



足元注意



踏切あり



出口



注意

住友海上

代理店

安心と安全をお届けするのは、
このマークです。



さわらない



破れ物注意



安全第一



歩行者注意



重り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安心と安全をお届けする



住友海上

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)



満足

何度も話し合い、一つ一つ解決していく。
信頼できるパートナーのおかげで、納得のいく土地活用ができました。

レジデンス豊のオーナー様

○
オーナー様の笑顔。
それが私たちのねがいです。




土地活用は、
長谷工にお任せください。

それぞれの土地が持つ歴史や周辺環境、
オーナー様の事情を真正面から受けとめ、
その土地の可能性を最大限に生かすこと。
そのために、私たちは
これまでの経験に、新しい法制度をとり入れ、
皆様のお役に立てる提案に努めております。



長谷工 コーポレーション

〒105-8507 東京都港区芝2-32-1
〒541-0046 大阪市中央区平野町1-5-7

☎0120-548-845 (午前9時～午後5時、土・日・祝 定休)
☎0120-641-174 (午前9時～午後5時、土・日・祝 定休)

<http://www.haseko.co.jp/hct/tokyo/>
<http://www.haseko.co.jp/hct/osaka/>